
陽だまりの砂時計

由樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽だまりの砂時計

【Nコード】

N2303A

【作者名】

由樹

【あらすじ】

『三題噺』引き込もっている少女を主人公にして進むお話です。短いのでさっと読めると思います。

私はなんとなく生きている。

やりたいこともないし人と付き合うのは面倒だから、部屋に引き込まっている。

両親は仲良く、よく二人で旅行に行くんだ。

私には関係のないこと。

だからあの人たちが私に無関心なのは有り難いし、それが自然だと思う。

別に好きで閉じ籠っているわけじゃないよ。外に興味があつたら出て行くもの。

でも…ここにいてと安心するのも事実。

誰も踏み込んでこない聖域だからね。

テレビを付ければ世間の動きも分かるし困ることなんてない。

時々ニュース番組でニートなんかの話題になるとね、笑える。

最近まで自分がそうだって実感がなくて冷静に見ていたから余計に高校の籍は抜いたから、今の私はまさしくそれ。

引き込まっちゃってるから典型的だよ。

テレビって便利だよ。

色んな番組あるから退屈しないし、時間も分かるし。

私の部屋にある時計と言ったら砂時計だけだから時間なんて分からないの。

父親にお土産でもらった白い貝と砂が混じったキレイな砂時計なんだよ。あの人はもう、忘れてるだろうけどさ。

あ……、もう夕方なのにカーテン開け忘れてた。

小学生の声が聞こえるから、きつと下校時間なんだろうな。

子ども好きだよ。純粹で、時々憎たらしくて、まるであの日の白い風船みたい。私は今も風船みたいにふわふわ漂って生きてるけど

——一体何色なの？

「ああー…」

窓をそつと開けると、小学生の落胆した声が聞こえてきた。

「仕方ないわよ、翔ちゃん。またもらってあげるから諦めなさい」

「でも……あの家に引っ掛かってるから、ピンポンしようよ。取ってもらえるよ」

「こら、ワガママ言わないの。またもらってあげるって言うてるでしょ？ 風船を離れたのは翔ちゃんだからね」

ママが持つててあげるって言ったでしょう、とお母さんらしき人は言い、男の子と手を繋ぎながら歩いていった。

カラ…

何の躊躇いもなくベランダへの戸を開ける。

「やだ… 白い風船じゃん……」

涙が出た。さっきの男の子が放してしまった風船が私の家に引っ掛かっていたなんて。

私はまだ白い？あの日迷わず白を指差した頃と変わっていないかな…？

涼やかな秋風に当たりながら、何年か前にお父さんにもらった砂時計を引っくり返す。

『見てご覧。』

人間はね、何か間違いを犯してしまってもこんな風にやり直せるんだよ』……につこりと柔らかく笑うお父さんは、私にそんな素敵な言葉をくれていた。

家族で遊びに行った時、目立たない白い風船を持つてはしゃぐ私に、『あのね、白は純粋なあまりどんな色にも染まってしまうのよ。素直に受け入れてしまうから…。』

だからママ達は、カオリが綺麗な色になるように支えて行くからね』という優しい言葉をくれたお母さん…。

今二人は私をどう思ってる…？ 嫌なことから逃げた、ただの弱虫な卑怯者だっと思ってる…？

今思えばそんなに辛いイジメじゃなかったかもしれない。

でも怖かったの…耐えられなかったの……。

何度も言おうと思った。

でも言えないよ。

暖かく私を育ててくれたお父さんとお母さんに情けなくって言えなかったんだよ。

戻れるかな？砂時計みたいにまたやり直せるの？

私は挑戦してみたいよ。まだ自分は、真っ白だって思えるようになりたいよ…。

空を見上げれば星が輝いている。

もうとつぷり日が暮れている。こんな綺麗な夜空忘れてたよ。

もう逃げない。自分の愚かさや甘えに気付いたから。

やりたいこと……本当はあるよ。

小学生の時からずっと、建築家になりたいと思ってる。

沢山の家族が幸せな家庭を築けるような、時には涙を乾かせるような…そんな家を作りたい。

「ただいまー」

お父さんとお母さんの微かな声。

「おかえりなさい！」

私は二年ぶりにこの言葉を言った。勢いよくベランダを飛び出し、階段を降りる。

そこには二人の顔がある…。少し老けたかな。

「ごめんなさい…っ」

私は大泣きしてるけど、構わず続ける。

「私…っ、やり直したい……。大検目指して勉強したい…。やり直したい……」

バカみたいに泣く私を見て、二人は微笑んだ。

いつかの陽だまりみたいなのほっとする笑顔で。

（後書き）

『風船』『時計』『夜空』の三題嚆の小説です。改行の場所が気に入らない箇所が多々ありますが、主人公が立ち直る話が好きなので書いて嬉しいです。読んでくださって本当に有り難うございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2303a/>

陽だまりの砂時計

2010年10月28日04時21分発行